

もう40年も前になるだろうか。父が中古のパチンコ台を買ってきた。センターにヤクモノがあり、その下に2連チューリップとサイドにチューリップが付いているシンプルな遊技機だ。中央ヤクモノに玉が入ると、どこかのチューリップが開く。うまくいけば2連チューリップが開き、50個ほどの玉が出る。夢中で遊んだものだ。

父が興じているパチンコを見るのが好きだった。一緒に店に行き、隣に座る。電飾と共に開くチューリップ、チリリンとなる賞球の音、タバコの煙と工業油が混じったような独特の匂い、玉が増えたときの父の笑顔。自分も大人になったらパチンコを打ちたいと思った。

高校を卒業し、4月1日にパチンコ店に行った。最初に打ったのはビッグシューター。100円ずつ玉を入れ、30分ほどで1200円使った記憶がある。その時からさらにパチンコが好きになった。数多の遊技機で遊んだ。ファン雑誌で研究した。勝つための理論を覚え、収支表を付け、「好きな台」だけでなく「勝てる台」を見つけてるように心がけた。そのおかげか大学時代、ほとんどパチンコの戦利品で生活できた。

## 寂しさ癒してかれこれ12年…

そんな私がパチンコ業界に就職し25年が経とうとしている。今は12年間余暇進でお世話になっている。その間は単身赴任だった。前職でも単身赴任を経験したから2度目である。

1人で遊ぶ最上の娯楽はパチンコだと思ふ。単身赴任の自分にはもってこいの遊びで、休日は日がな一日パチンコ・パチスロで遊ぶ。昔のようにはいかなないが、小さいの範囲内で遊べるくらい腕はあると自負している。

面白いもので長時間遊んでいると、パチンコとパチスロに明確な違いがあることがわかる。

パチンコは自分の意識が少しずつパチンコにシフトするよるに思える。騒がしかった店内が、遊技機の音や光が、徐々に淡くなる。玉の動きを漠然と目で追っていると頭の中が真っ白になる。まるで釣りをしていて、ぼんやりとウキを見ている感じに似ている。

一方パチスロは騒がしい。1ゲーム1ゲームの挙動で、その台の設定を見抜こうとする。隣台や後方

の台の挙動も把握する。頭の中は常にフル回転だ。それはルアーを泳がせながら魚を攻略しようとする釣りに似ている。

パチンコは頭を空虚にし、パチスロは頭をフル回転させる。どちらも世俗と離れ、常に頭の中にあるストレスから一時的に開放してくれる。

個人的感覚だから他の人がどうかはわからないが、私はパチンコをすることで多くの不安や悩みをコントロールすることができた。妻には迷惑をかけたが、当時小学生だった2人の子供も立派に育った。1人はホールの正社員、1人はホールアルバイト。物心共にパチンコに支えられ、ここまて来た。だからパチンコにはもう一度ファンを増やし、国民の楽しみとして復活してほしい。

まずは英気を養うために、今度の休みはゲーム業界の友人とアナログ系パチンコを、その次の休みは通信業界の友人とパチスロを一緒に楽しむ予定だ。



はじめての単身赴任時のクリスマスの写真。娘3歳9か月、息子9か月

閑  
忙中感ありあり

遊技業界の各団体が黒子役として奮闘している事務方さんたちのちょっといい話を随時掲載します

余暇進事務局長  
田中 弘  
たなかひろし

1970年生まれ。熊本県出身。2000年より余暇進勤務。単身赴任歴12年。趣味：パチンコ、プロレス観戦